

# 熊谷桜堤 ～北条氏邦が荒川の氾濫に備えて築いた堤防～

江戸時代には熊谷の花見として江戸まで聞こえ、  
現在の新熊谷堤はさくらの名所100選に選出されています。

荒川上流部改修から  
**100**年  
1918-2018



熊谷桜堤



熊谷桜堤の碑



熊谷さくら祭



ライトアップされた満開の桜



河畔で花火大会

## 熊谷桜堤

熊谷桜堤は、荒川の堤防沿い約2kmにわたり500本のソメイヨシノが植えられ、江戸時代より桜の名所とされていました。4月上旬桜の開花期には「熊谷さくら祭」が開催され、桜の開花状況に応じて、1週間ほど開催されます。花見客で賑わいを見せており、夜にはライトアップされた桜を楽しむことができます。

1990（平成2）年日本さくらの会により「さくら名所100選」に選ばれており、桜堤を熊谷市民のシンボルとして長く後世に伝えていきたいとの思いから記念碑がたてられています。



熊谷桜堤の碑

## ▶ 熊谷桜堤の歴史

熊谷桜堤は、約400年前に鉢形城主※北条氏邦が、荒川の氾濫に備えて築いたのが始まりと言われていいます。中山道の宿場町当時には、熊谷の花見として江戸まで聞こえた熊谷桜堤でしたが、明治時代に入り、桜は枯れてしまいました。1883（明治16）年、竹井澹如（たんじょ）、高木弥太郎らが、熊谷桜の再現を考えて東京から450本の桜を購入し、夜を徹して堤に植えました。この年が、上野～熊谷間の鉄道開通の年で、当時の日本鉄道（株）は、桜の木の運搬を無料で行ってくれたそうです。

その後、1925（大正14）年の熊谷の大火以来衰えを見せ始めましたが、市制20周年記念事業として、1952（昭和27）年から荒川沿岸の新熊谷堤に植樹をし、現在の見事な熊谷桜堤に引き継がれています。

※鉢形城・・・寄居町の荒川右岸に位置する城



竹井澹如翁碑（熊谷市万平公園）

## ▶ 旧熊谷堤

1918（大正7）年から始まる荒川上流部近代改修により、新しい熊谷堤が築かれそれまでの旧熊谷堤は荒川の左岸堤防としての役割は終えました。もともと桜の旧堤は約4kmに及び、1千本の桜が植えられ、吉野（奈良県）、小金井（東京都）とならび桜の三大名所と称されており、1927（昭和2）年8月には内務省の「指定史蹟天然記念物」指定されたほどです。熊谷市にある万平公園には、旧熊谷堤が200mにわたって数本の老樹の桜とともに残っており、「名勝熊谷堤碑」「熊谷場栽桜碑」も残されています。

また、万平公園の東端、名勝熊谷堤碑の脇には、内務省19/30の文字が記された測量の基標が残っています。昭和初期の荒川近代改修の際に設置されたものだと思います。なお竹井澹如は1869（明治2）年に私財を投じて、旧熊谷堤から荒川に向かって突堤（万平出し）を築いています。万平出しとは、熊谷町を荒川の洪水から守るための水制工で、この付近から荒川の河道に向かって延びていました。しかし、万平出しによって対岸の大里村側では、堤防決壊の被害が大きくなり、紛争の種でもありました。



旧熊谷堤（熊谷市万平公園）

## コラム ソメイヨシノとは

ソメイヨシノとは日本原産種のエドヒガン系の桜とオオシマザクラの交配で生まれたと考えられる日本産の園芸品種です。日本では明治の中期より、サクラの中で圧倒的に多く植えられていた品種であり、今日では、メディアなどで「桜が満開した」といときの「桜」はソメイヨシノを意味するなど、現代の観賞用のサクラの代表種です。

名前の由来は、染井村（現在の東京都豊島区駒込）の植木屋が江戸時代末期にサクラを交配させて出来た新種のサクラの名前を当初、サクラの名所として古くから名高い吉野山にちなんで吉野桜にしましたが、吉野山のサクラはヤマザクラ系のものが多く、エドヒガン系とオオシマザクラのサクラを交配したために紛らわしくなっていました。考えた末、町の名前をくっつけようということで、染井＋吉野＝ソメイヨシノとなりました。

## アクセス

### 熊谷桜堤と万平公園

交通：JR上越新幹線・JR高崎線・秩父鉄道  
秩父本線「熊谷駅」下車、徒歩5分  
住所：熊谷堤 熊谷市河原町2丁目地先  
万平公園 熊谷市万平町1丁目1番地



熊谷桜堤

